

研究課題	多様性を認め合い、「誰一人も置き去りにしない」インクルーシブな学校づくりを目指して
副題	～フィリピン日系人学校とのオンライン授業を中心に、みんなで Well being (持続可能な幸せ) に～
キーワード	インクルーシブな学校
学校/団体名	公立愛川町国際教育研究会
所在地	〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 1400
ホームページ	http://www.aikawa-edu.jp/sch/aikawahigashi-jhs/

1. 研究の背景

愛川町は、神奈川県の中で外国につながるの児童・生徒の割合が一番である。また、本校は全18学級、全校生徒が456人である。そのうち15か国90名の外国につながるの生徒がいて、約20%を占める国際色豊かな明るい学校である。しかしながら、言葉や文化の違いによる問題、不登校、ヤングケアラー、虐待、経済的困窮など、課題が多岐にわたっており、支援策を考える必要があった。2021年3月に神奈川県教育委員会とJICA横浜が「外国に繋がりのある子ども達を中心にインクルーシブ教育・多文化共生教育を推進していく」という趣旨となる連携の覚書を交わし、神奈川県の小・中3500以上の学校がある中で、愛川町立中津小学校（私が元校長）がその開発校として立候補し、県で初の国際教育コーディネーターを校務分掌に位置付けた。2022年4月に私は中津小の卒業生が入学する愛川東中学校に赴任したが、9年間の小中一貫教育の中で「インクルーシブ教育」の必要性を感じ、同じく国際教育コーディネーターを設けた。

また、2023年1月の愛川町国際教育研究会の話の中で、「この2年間でフィリピンから日本に来る生徒が4人と多く、これらの生徒を笑顔にすることができないか？」という提案を私がしたところ、JICA横浜を通してフィリピン大使館とに連絡が取れ、その後、数回のオンライン会議を経て、2023年9月からのフィリピン日系人学校とのオンライン授業に繋げることができた。

さらに、前任校から、外国につながるの児童・生徒・保護者が置き去りにされている現状があった。現在の日本の教育では、児童・生徒指導担当と教育相談コーディネーターが要となって、指導・支援に努めてきたが、課題や問題が多岐にわたり件数も多く、対応しきれない状態が続いた。その課題を克服するために、校務分掌上に「国際教育コーディネーター」を位置づけることで、外国につながるの児童・生徒・保護者が置き去りにされている現状を変えられるか研究していきたい。

2. 研究の目的

多様性を認め合い、「誰一人も置き去りにしない」インクルーシブな学校づくりを行っていききたい。

1. 学区の小・中学校の校務分掌上に「国際教育コーディネーター」を位置付け、外国につなが

りのある児童・生徒・保護者の困り感や課題を早めにキャッチし、迅速かつ適切に解決に導いてきた。特に日本に来たばかりの児童・生徒達が、安心・安全に日本の学校に慣れ親しみ、笑顔で学校生活を送れるようにする。

2. SC・SSW・日本語指導協力者の存在は教育活動を行う上で大変重要な位置を占めてきている。問題が起きても、それ以上に大きくならないように、専門職と連携強化に努めていく。
3. 外国につながるのある子ども達が、日本語を理解し日本語を使って対話したり、ICT 機器やポケトークを活用したりしながら、自信をもって日本語で表現できる生徒を育てていく。
4. 日本で初のフィリピン日系人学校とのオンライン授業を行うことで、現地の授業を受けながら、チャットで質問したり、質問に答えたりしながら、主体的に授業に取り組ませる。
5. 外国につながるのある児童・生徒のキャリア教育の一環で、近隣の高校と連携を取り、高校生が学校に来て学習を教えたり、悩みの相談にのったりして、アイデンティティを再確認できる機会を設定する準備をしていく。
6. 学校全体で学力向上を目指す。そのために、校内研究会にメスを入れ、教員の授業改善につなげていく。

3. 研究の経過

フィリピン日系人学校とのオンライン授業に対して、今年度で2年目になったが、参加生徒がストレスなく笑顔で主体的に授業に臨んでいた。現地の生徒と触れ合う中で自分のアイデンティティを再確認できる機会の一つになっている。

また、国際教育コーディネーターを校務分掌上に位置付け、外国につながるのある児童・生徒・保護者の困り感や課題に寄り添いながら、問題解決に努めてきた。県や全国では、児童・生徒指導担当や教育相談コーディネーターが中心となって児童・生徒指導や支援に努めているが、現状限界である。国際教育コーディネーターを早急に配置し3名体制で、外国につながるのある児童・生徒・保護者の困り感や課題に対して迅速かつ適切に対応し、「誰一人も置き去りにしない」体制づくりができてきている。

さらに、生徒の学力向上については、校内研究会等を前年の2回から9回に増やし、教員の意識改革・授業改善に努めてきた。「誰一人置き去りにしない授業づくり」で「個別最適な学び・協働的な学び」の特に「個別最適な学び」に重点を置き、Cの子はBに、Bの子はAに、Aの子はA°を意識し、ICTを活用した授業づくりや発問の仕方、支援の仕方を研究してきた。校内研究会のスーパーバイザーである玉川大学教授や神奈川県教育委員会指導主事が何度も来校され、授業巡回や指導案検討、プレ授業指導助言、校内研全体会の指導助言等、丁寧に行ってくださいました。そのおかげで教員の意識が変わってきた。

4. 代表的な実践

1. 「誰一人も置き去りにしない」インクルーシブな学校の開発のために、また学力向上のためには、「生徒が参加できる・わかる授業」でなくてはならない。スクールタクトを中心としたICT 機器を効率的に活用し、全職員が研究授業を行った。玉川大学教授に指導と助言を仰ぎ、

さらなる研究・開発を行った。

2. フィリピン日系人学校との理科のオンライン授業に関して、JICA 横浜の技術顧問の先生に指導助言をいただき、フィリピン日系人学校に対しても、オンラインミーティングを密にしながら、生徒の資質・能力が向上するような授業になるように連携した。
3. 国際教育コーディネーターの役割と成果を国際教育コーディネーターが6回にわたってプレゼンテーションし、町・県・全国の研修会等に発信することができた。
4. 学校のグランドデザインが作成して終わりではなく、そこに生徒の到達目標を記載している。PDCA サイクルを意識し、研究・開発の成果・課題を整理し、分析を行い、今後の研究・開発に生かしている。

5. 研究の成果

学校評価による生徒アンケートでは、「学校が楽しい」、「学校生活が充実している」は評価目標が90%、R5 91.3%、R6 93.7% 「授業がわかる」は評価目標が90%、R5 91.3% R6 89% 「お互いの気持ちを大切にしてい、自分で考えて行動できる」は評価目標が95% R5 89.3% R6 93.5% 不登校数・・・微減 しかし「SC・



SSW 等、関係機関と連携ができてい」は約90% **(日本に来て5日目の生徒 自己紹介O)**

(国の統計は約60%)と評価目標を超えている項目が多い。

(ア) インクルーシブ教育・多文化共生教育の推進

「誰一人も置き去りにしない授業」「インクルーシブ教育・多文化共生」を目指し、年2回の授業研究を行ってきた。また、指導案検討・プレ授業・校内研全体会等、「インクルーシブ教育・多文化共生教育」の専門の大学の先生や県指導主事を年10回講師に招き、全職員が共通理解をしながら、研究を進めていった。

(イ) 国際教育に精通している SC の配置

外国に繋がりのある子ども達のアセスメントが大変難しい。本人の言葉の問題なのか、経験値の問題なのか、発達の問題なのか、本人を取り巻く環境の問題なのかが教職員だけではわからない。心理職専門の SC が本人を観察・面接等を行い、本人の学校での困り感が何なのか、どんな支援が必要なのかのアセスメントを教職員や保護者に伝えることができた。

(ウ) 国際教育コーディネーターの配置

国際教育コーディネーターの校務分掌の位置づけが全国的にはほとんどない。本校が先進校として、国際教育コーディネーターを配置しその役割を担い、実践していった。国際教育コーディネーターの役割を町の日本語指導・国際教室担当者会議で、担当者全員に対してプレゼンを行った。国際教育コーディネーターの意義を町の小・中学校教員に浸透させることができた。また、国際教育コーディネーターの必要性を県・全国の研修会等で発信することができた。他には、国際教育コーディネーターの仕事が多岐にわたり多忙のため、国際教育コーディネーターの後補充職員の配置を県に強く要望し、その実績を認めてくれた。

(エ) 県立愛川高校との連携

県立愛川高校には在県枠があり、本校からも数名の生徒が入学している。今年度は愛川高校と連携し、外国に繋がりのある高校生が本校に来て、本校の子ども達に授業を行う計画ができた。次年度から実行に移していきたい。

(オ) 日本初フィリピン日系人学校の中学生とのオンライン授業等

昨年度の9月から日本初のフィリピン日系人学校との理科のオンライン授業が始まって2年経ったが、順調に行うことができた。オンラインでのミーティングもスムーズに行われ、大変温かい雰囲気の中で交流を深めることができた。子ども達がオンライン授業に対して、主体的にかつストレスなく臨んでいた。また、ACCUのユネスコの関係者が本校を訪問された。



授業を参観され、本校のインクルーシブな学校 **(オンライン授業の様子 抵抗の授業)**

づくりについて説明を聞き、各国のインクルーシブ教育について情報交換を行った。貴重な体験となった。外国につながる子ども達は、日本に来て不安を抱えていると思われるが、全職員によるバックアップ体制により、生き生きと学校生活を送っている。フィリピン日系人学校のオンライン授業に参加した生徒の感想では、「オンライン授業は日本の勉強によ**(ACCU ユネスコの皆さんと記念写真)**



るストレスを感じなく取り組めるからよかった」「オンライン授業を受けて、フィリピンの仲間と仲良く学習することができてよかった」、「オンライン授業はよかったし、楽しむことができた」、「フィリピンの学校の先生は、いつも優しく助けてくれるので、感謝している」等、プラスの意見が多かった。「フィリピンの学校の先生は、私をいつも優しく助けてくれるので感謝している」、「コミュニケーションが取れるのが好き」等、たくさんの良かった点が挙げられた。

6. 今後の課題・展望

課題として、外国につながる生徒や保護者は進路に対して不安がある。その改善策の一つとして、次年度は国際教室の卒業生講話を令和7年8月29日に行う予定である。外国につながる生徒は、日本に来てこれからの自分自身の進路に対して不安に感じたり、将来の展望が持てなかつたりしている様子が見える。中学生が「こんなお兄さんになりたい、お姉さんになりたい」と思えるような卒業生講話を実施し、キャリア教育の一環として、またアイデンティティを再確認する機会の一つとしたい。今後さらに外国からの労働者が増えることが予想され、その家族である子ども達も増えるであろう。外国に繋がりのある子ども達の問題や本人を取り巻く環境の問題等、多岐にわたって丁寧な対応が必要だが、現場にはそれらの問題に対応する人的配置等が全く足りない。問題は山積している。

また、10月に外国につながるある保護者のための進路説明会を行っているが、町の近

隣の学校にも声掛けし、進路に対して困り感のある保護者には来校してもらい、国際教育コーディネーターがいていねいに進路に関して説明会を行う予定である。日本語指導協力者にも来てもらい協力を仰ぐ。

さらに、フィリピン日系人学校とのオンライン授業は2年目を迎え、スムーズに進行することができた。今後も継続していきたい。多言語に関してもオンライン授業ができる国が調整できれば行っていきたい。

また、外国に繋がりのある子ども達や保護者に関する問題が山積している中、全国にはほとんど位置づけられていない国際教育コーディネーターを校務分掌上に配置し、一つ一つの問題に対して丁寧に解決してきた。インクルーシブな考え方は教員に浸透してきたと思うが、まだまだのところもある。その点は引き続き取り組んでいきたい。

今年度は、玉川大学教授・神奈川県指導主事が年間10回ほど来ていただいたおかげで、授業改善への教員の意識改革につながった。誰一人も置き去りにしない学校づくりを行ってきたが、特に個別最適な学びについては、教員の意識が変わってきたと感じる。教員が一人一人の生徒の課題を見極め、多様な支援の仕方に心がけていた。「いっしょにどうしたら質の高い授業になるか」、「子ども達の資質能力を向上させられるか」、「全員が参加できる・わかる授業になるか」、「自分の考えをしっかり持ち、仲間にきちんと自分の考えを伝えられるか」など、次年度も引き続き研究を推進していく。全職員の授業公開も引き続き行っていく。教員同士で自分の授業を見合う中で、助言をもらい合うことで、必ず自分にはない気づきもらえるはずである。授業公開をして終わりではなく、見ていただいた先生方から助言をもらい、自分の授業改善につなげていく。授業の内容がよくなれば、必ず生徒も楽しく授業に参加し、わかったと実感でき、明日も元気に学校に登校できると思う。次年度も、玉川大学教授・神奈川県指導主事が年間10回ほど来ていただく予定である。さらに教員の授業改善に努めていきたい。

また、3月26日のJICA横浜と県教育委員会が主催のオンラインミーティングに校長が登壇する予定である。国際教育コーディネーターの実績を全国に発信し、全国的に国際教育コーディネーターの必要性を訴えていく。全国で外国に繋がりのある子ども達が増えている中で、困っている子ども達や保護者、そして対応に苦慮している教職員を助けていきたい。外国に繋がりのある子ども達の未来を笑顔輝く明るいものにしたい。

7. おわりに

小学校で2年間、中学校で3年間、校長を務め、「誰一人も置き去りにしない学校」づくりに私なりに一生懸命努めてきた。まだまだ課題はあるものの、卒業式に全員参加できるなど、多くの成果が見られたことは嬉しい限りである。誰一人も置き去りにしない、インクルーシブな学校づくりを行ってきたが、思いだけでは実現できない。「人」・「もの」・「お金」がそろって学校運営ができていく。行政だけでは教育予算に限りがあり、今回、パナソニック財団の助成金は、我々の思いを実現するのに大変役立たせてもらった。今後も本校だけでなく、多くの全国の学校が魅力ある学校になるように、また教員が笑顔で元気になるように、助成をお願いしたい。

最後に、インクルーシブな学校づくりにこの3年間務めてきたが、今年度の卒業式は、3年生145名全員が式場に入ることができた。これは本校の歴史においてもないことであり、快挙である。不登校生徒や外国につながる生徒など、多岐にわたる課題がありながら、職員が日ごろからの丁寧な対応をしてくれたおかげである。インクルーシブな学校づくりを続けてきた成果の表れと感じている。

8. 参考文献

・木村泰子先生の講演・教職研修「木村泰子のみんなに伝えたい『ことば』」、工藤勇一先生の講演（校長会や本校に来ていただいたの講演）